

## ヨハネ「福音書」の竜骨をなす黙示的諸表象の連鎖 および 第三ゼカリヤ

川崎医療福祉大学 共通科目担当

佐々木 寛 治

(平成13年10月12日受理)

Eine kielbauende Reihe der apokalyptischen Vorstellungen im Joh. „Evangelium“  
Und III. Sacharja

**Kanji SASAKI**

*Beaufragte mit allgemeinbildenden Fächern,  
Kawasaki Universität von Medizinischer Fürsorge  
288 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0193, Japan  
(Received on October 12, 2001)*

### 概 要

「穴からの水」——ヨハネ共同体の抑うつポジションから生じた最も重大な表象。ヨハネ「福音書」にはこの種の黙示的表象の連鎖がその竜骨をなしている。4,1-26:7,37-39:19,31-37:20,24-29。これら諸表象は第三ゼカリヤにも淵源する。キーワード: ヨハネ「福音書」, ゼカリヤ, 黙示的表象, 水。

### Resümee

„Das Wasser aus dem Loch her“ — Eine wichtigste Vorstellung, die unter der depressiven Einstellung johanneischer Gemeinde her entsteht. Es gibt eine kielbauende Reihe derartiger apokalyptischen Vorstellungen im Joh. „Evangelium“ 4,1-26:7,37-39:19,31-37:20,24-29. Diese Vorstellungen entstammten auch aus III. Sacharja.  
Key words: Joh. „Evangelium“, Sacharja, apokalyptische Vorstellungen, Wasser.

### 1. 問題の所在

#### 1.1 対象関係論を参照する, 筆者の方法模索の現段階

1.1.1 大貫全時論(その理念示現=叙述論, 福音書論, テクスト理論, 言語論)の圧倒的影響の下に筆者は1996年, ヨハネ「福音書」の学びの道に導かれた<sup>1)</sup>。この間筆者は「知らなかった!」と、叩きつけるようにして思い知らされてきたことがある。2000年前に書き留められたまことに異様なこのテキストが垣間見せる, ある種の垂直感覚を伴う情感的で身体躍動的な次元の見方・感じ方・表現の仕方が確かに存在していたのだということ, そして逆にわれわれには(筆

者には) 余りにも多くのものが「もはや見えなくなったもの、聞こえなくなったもの」となっているのではないのかということ。かつて確実に存在していて、いま喪失の淵に立つものがあ  
る、というこの落差の感覚を重要なことと意識しつつ、〈現時での神の自由な働きかけ〉への緊張感のなかで聖書学を学ぶべきことを、E・シュバイツァー、E・ケーゼマン、並木浩一の三氏から、筆者は未熟なままに、教わりつつあるつもりである。

1.1.2 筆者には、上の落差への注目を深めつつこの特異なテキストの学びを貫き通すためには、それに対応する特異な記号論、音韻論、言語論、テキスト理論、認知理論、精神分析学などの形成を平行して進めざるをえないことが痛感され、あれこれ手当たり次第の短兵急な模索を重ねてきた。そしてその模索の方向として、現代の孤立した自我の客観主義的科学主義的言語活動を対象化し、そこから脱皮していく手だてを見出すためには、何よりも先ず最大限に、〈失われた認知表現活動〉へ発見的に再接近してみるべきである<sup>2</sup>、と考えてきたのである。様々なレトリック構造の抽出とその定式の確定、意味内容の分析はその重要な一環をなす。

1999年暮れの段階で筆者には、ヨハネ「福音書」8章後半において「無意識の次元の強力な

<sup>1</sup> テキスト表面(の歪み)に、「父のもとから地上に来、受難を経、十字架を通過して復活高挙され、いまや父のもとにあって聖霊を送っているという、自らの広大な歩みの始・中・終の全過程を現在的に一括して示現する人の子・イエスが叙述されている」、という驚くべきテキスト事実。しかもこのまことに不思議な事態のディスクールが学問として論じられうる場が形成されつつあるという、もっと驚愕すべき事実。筆者はこのことに震撼された訳である。聖書学、神学の何たるかには全く無知で、その学問の基礎的訓練を何ら潜っていない筆者は、学びの道の入口で、このようなヨハネテキストの〈建築術〉に目を奪われ、〈構造体分析〉と呼ばれる種類の作業に熱中していたのである。

<sup>2</sup> その意味からみてもブルトマンの、現代人の思惟活動様式(端的に彼は、ナチス体制下の「新聞、ラジオ、学校」で通用している考え方、と注記している)をむしろ基準にとり、過去のそれを解体しようとする「非神話化論」は、凄惨な反文化的暴挙である。ナチス国家の戦時下で、一口に六百万人といわれるホロコーストの進行中に、ブルトマンは次のような発言ができた。「国家において人間は自己自身に、自己の本来的な人間性に達する」などと。彼は次のように論を反ユダヤ的に展開する、「都市国家のなかにその故郷をもつ人間は、同時に、世界の神的な秩序に組み入れられていることを自覚する。しかし、彼がこの神的秩序に出会うのは、ほかならぬこの都市国家においてなのである。彼らの神々は、セム諸族——イスラエルは別として——にみられるような自然神ではなく、もともと国家としての諸民族の神々なのである」、「わたしたちは、心の奥底において、つねにギリシア人なのである。というのは、ギリシア精神においてこそ、普遍的な人間的態度が、まったく徹底的につくりあげられるのだから。それは、とりもなおさずこの世界を占有し、それによって、自己を確保しようとする努力である」(『新約聖書およびギリシア精神における世界と人間の理解』1940山岡・小野訳 アンダーライン引用者)。ユダヤ人がユダヤ人であるがゆえに日々大量に殺害されるという体制をこのように公然と後押ししているブルトマンは、セム族一般と区別された「われらギリシャ人」を呼号している。彼の「決断の二元論」はこのように血塗られた祭壇の上で語られているのだ。彼の「非神話化論」はこのような「隠された語られざる教義学」が産み落とした蛮行である。筆者はケーゼマンに触発され導かれて、「非神話化論」が消し去ろうとする)ヨハネ「福音書」の黙示的表象の存在こそが、この「福音書」の最大メッセージ＝ヨハネ共同体のイエス遭遇の告知の淵源をなすものであることを主張する。ケーゼマンには師のあの「隠された語られざる教義学」は丸見えなのであり、彼はその糾弾を、聖書学の枠を超えないよう細心の注意を払いつつ、遂行する。その最大の武器が、認知の一次性・直接性の強調である、と筆者は考える。

情感」が言語化・テキスト化されていることの委細を突き止めること（そして日常言語活動が不可避免的に孕む主体抑圧の諸相の解明）が課題となった。精神分析学を初歩から参照しはじめた筆者はラカン言語論、フロイト・ラカン事後性論への注目を経て現在、対象関係論的考察（とくにメラニー・クラインの「抑うつポジション」論から見たそれ）の端緒に至っている。ヨハネテキストの読解に向けた記号論等々の諸個別理論の、その扇の要ともいべきものが、メラニー・クラインの象徴化理論の「イスラエルの次元」とも呼べるものの中に見出されつつあるように、筆者は現在考えている。

## 1.2 「済まなかった」の悲哀と罪意識のなかではじめて、ひとは「対象の全貌」に出会う

1.2.1 対象関係論は「三次元の内的世界」の存在を前提にし、母子間対象関係の形成史を考察の原点に据える。

メラニー・クラインにとって人間は生の本能と死の本能のせめぎ合いのうちに生まれ落ちる。死の本能は一連の不安のカテゴリの本源であり、それは先ず主体を圧倒し爆破しかねない破壊—解体不安として噴出する。この強力凶暴な不安を防衛する活動に「排泄による投影同一化」の活動がある。赤ん坊は外界対象へと自らの死の本能を投影し、この対象から自分が迫害されていると受けとめる訳である<sup>3</sup>。

これが原初の〈破壊—解体不安〉がまず〈迫害不安〉へと転化していくメカニズムであり、おそらくこのステージが、出生した赤ん坊の強力でドラスティックな対象関係論的行為の最初（生後2～3か月までの）であろう。最初はまったく混沌として断片的でしかない様々な「良い対象」、「悪い対象」という「部分対象」は、基軸的には「良い乳房」、「悪い乳房」として要約される。こうした「部分対象」は、合一を求めるリビドーと破壊し尽くそうとする攻撃性の狂奔するアンビヴァレントな「投影と取り入れ」の流動過程のなかで統合されてゆき、やがて「全体対象」（基軸としては「全体対象としての母親」）が成立するとされる。

1.2.2 「全体対象」成立機制で筆者が最も注目するのは、主体による「罪意識と対象愛」の原初的発生のうちにのみ「全体対象」が成立する、という点である。

「悪い乳房」への徹底的な破壊攻撃が先行していること、この破壊攻撃を潜ってなお対象が「生き残った」ことが知られ、しかもそれは、かつてはこの「悪い乳房」とは別ものとみなされていた「良い乳房」と異なるものであったのだとして知られるということ、こうして「申し訳ないことだった」という悲哀（喪）、罪意識のうちに、「悪い乳房」と「良い乳房」との底に、「全体対象としての母親」が前々からいたのだったと、気付かれるに至り、ここに pining の

<sup>3</sup> そもそも主体が自分の内界で、内部の死の本能を「分割 splitting」してこれを「悪い自己」とすることがすでに、いわば自分の重荷を下ろす準備となる。「悪は外から来る」と見立てる戦略が開始するからである。このときから主体は、「悪い自己」と対をなすものとして外界へと投影された「悪い対象」から、つまり主体の外から、迫害攻撃を受ける者となるのであり、不安は質的に軽減されることになる。

相の下に対象愛が始まるということ(抑うつポジション)。

十字架の下に立つ者にとって、以上の全体対象確立過程は、不思議に、「イエスは主なり」(イエスこそが主であった)と告白する自分の意識の根底において進行している、その当のものと、どこかで深く共鳴していることが感じられる。

——くイエスはどこから来られ、来られて何をなされ、どこへ行かれ、行かれて今何をなされているのか。イエスが「死なれることによって」、つまり象徴系の彼方に出られて初めて、パラクレオトスが派遣され、この方の助けによってひとは「事後的に」、「イエスはそういう方だったのだ」とその全貌が思い知らされる。

このようにして「全体対象としてのイエス」に、「申し訳ありませんでした」という「抑うつポジション」の悲哀と罪意識のうちでこそ出会った、ヨハネ共同体の根基をなす体験。この体験を伝えるものがヨハネテキストの表面に、豊かな黙示的表象の連鎖の中に示現/叙述されている。それはテキスト全体の竜骨をなす同位体である。筆者はそれをルカの外部注入言語へのヨハネの感情的イメージ言語からの批判として見出し、その詳細をすでに発表した(後述)。

本小論はこの黙示的表象の連鎖の根幹部が「第三ゼカリヤ」との深い共鳴関係のなかにもその根をもっていることを報告し、対象関係論をさらに参照しつつなされるべき新しい歴史的次元での考察への端緒を切り開きたい<sup>4</sup>。

## 2. 問題としての「壊れた身体」——イエスの「手の穴」

### 2.1 幼き者へのメラニー・クラインの感受性とその視線の先にあるもの

メラニー・クラインは人間の自然 natura に太古的に垂直に書き込まれた悲惨(根源的な不安)の奥の奥へと分け入り、そこへ出現している何ものかに言葉をもって応答せずにはおれなかったように思われる<sup>5</sup>。

ここでクラインの強烈なものの見方の一端を見ておきたい。筆者はクラインの特に次のような感じ取り方に感動をもって吸引されている。

私の主張は、子どもは成人の喪に匹敵する心の状態を体験するというよりは、むしろ後の人生で悲嘆の体験をする時は幼児期早期の喪の体験がいつも蘇る、ということにある。……赤ん坊の体験する抑うつ感情はまさに離乳期やその前後に頂点に達する、と述べた。これが抑うつポジションと命名した赤ん坊の心の状態であり、メランコリーの起こり始めの状態であろう、と示唆した。哀惜の対象は母親の乳房であるが、幼児の心の中で乳房とミルクを意味するすべてのもの、すなわち愛情、善良さ、安全感などにわたる、このすべ

<sup>4</sup> 筆者の志としては、この作業全体がそのまま、一方でケーゼマンの黙示思想理解・認知理論を掘り下げるものであり、他方で(イメージと感性性を限りなく零度に近づけようとする)孤立的現象学的自我の、つまり対象関係論なき主体の、「実存論的解釈」への批判の遂行であろうとするものである。「抑うつポジション」論における「全体対象の成立」の考察は、不可避的に「キリスト論的内包」を、とは言葉、「救済論を内包する新しいキリスト論」を、構築することを強制する。

<sup>5</sup> 危険を孕み抑制の利きかねるクライン的解釈。クラインの「解釈」は「内的世界」にうごめく当体への解釈として、黙示思想の言語、あるいは後期預言者文学の言語を思わせるところがある。

てが失われた、と赤ん坊には感じられるのである。しかも母親の乳房に向けられた(赤ん坊自身には、抑えることのできない)食欲で破壊的な自分の空想と衝動のせいでそれが失われたのだ、と感じられるのである。「喪とその躁うつ状態との関係」1940 (下線部は引用者により、抑うつポジションに特徴的な罪悪感)

『メラニー・クライン著作集3 愛、罪そして償い』誠心書房 1983 所収 124

成人が離別に際してどんなに深く悲哀(喪)に打ちのめされようと、それは幼児が離乳期の前後に体験して無意識のうちに抑圧されている悲哀の重さに比べるべくもない、というふうに聞こえさせる。幼き者の、その無意識の底に埋められている膨大な深い悲しみへの、クラインの共感的注視には、筆者は圧倒されてしまうのである。上の記述に現れたような、情感への生々しく深いクラインの視線が行き着いた先の幼児期のものを一般化して、われわれはく成人の抑うつ的情感の原初的震源と呼ぼう。そのようにして、成人の情感において幼児期の(われわれに忘れられた)激情が反復し蘇るという、フロイトとはまたニュアンスの違う、視点を学ぼう。

## 2.2 痛々しさの感覚の中での「全体対象」の出現

上掲引用文下線部に、「壊れた身体」という問題群の根幹が語られていることに注目したい。

赤ん坊に「乳房の不在」が理解できるようになるのは、発達ラインの遙か後期のことである。ミルクを飲みたいのにその瞬間にそこに乳房が無いとき、赤ん坊には「悪い乳房」が「いて」、この「対象が」「自分を」困らせ怒らせているのである。当然赤ん坊はこの「悪い乳房」に破壊の限りを尽くしてこれを「傷つける」。それは幻想上の破壊活動に留まらない。(遅れて対応する)現実の乳房への物理的・心理的攻撃であることも多い。やがて赤ん坊にとって、「悪い乳房がある」のではなく「良い乳房がない」のだということが、——「自分の破壊行為の結果として」——知られるようになる。赤ん坊にとって対象不在のカテゴリーは、く自分によって無惨に破壊し尽くされてしまった」という相ではじめて登場する。そしてこれに基づいて直ちに、く自分の破壊活動によって喪われた何か」という陰面の姿をまとうて「全体対象としての乳房=母親」が、意識の地平線上に登場してくる。

く自分の手による破壊=喪失」が気付かれたときはじめて、く失われたものの貴重さ豊かさ」が事後的に思い知らされる。「全体対象=母親」は赤ん坊にとって、客観面では痛々しい壊れた身体として、主観面では不可避的に自らの罪意識にかたどられて、成立するのである<sup>6</sup>。

## 2.3 イエスの「手と足」にヨハネ共同体が見たもの

次頁の対照表で、情感の防衛という重大な問題点を度外視すれば、ルカテキストの、イエスが「手と足を」お見せになった経緯、そのことによって弟子たちが喜んだ次第は、まことに合理的で自然である(情感の合理的防衛でもある)。ヨハネテキストはなぜイエスが「手とわき腹」をお見せになったのかは全く説明されておらず、ルカテキストを参照して初めてその理由と、弟子たちが喜んだ訳が理解できるに過ぎない。さらに「手と足」ならまだしも「手とわき腹」は極端化されて不自然であり、「喜んだ」という場面は単純化されすぎて不自然であ

<sup>6</sup> メラニー・クラインの対象関係論においては、一見水平に見える関係性が実は、垂直のモラル感覚ともいえるものに常に支えられている。赤ん坊は、piningの情感のうちに垂直に問われつつ、痛々しく壊れた「全体対象」の創造に出会わされるのである。

|   |  |
|---|--|
| <p>そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、<br/>「あなたがたに平和があるように」と言われた。</p> <p>20:20 こう言って、手とわき腹とをお見せになった。<br/>καὶ τοῦτο εἰπὼν ἔδειξεν τὰς χεῖρας<br/>καὶ τὴν πλευρὰν αὐτοῖς<br/>弟子たちは、主を見て喜んだ。<br/>ἐχάρησαν οὖν οἱ μαθηταὶ ἰδόντες τὸν κύριον.</p> | <p>24:36 こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、<br/>「あなたがたに平和があるように」と言われた。<br/>24:37 彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。<br/>24:38 そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。<br/>どうして心に疑いを起こすのか。<br/>24:39 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。<br/>亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えたとおりわたしにはそれがある。」<br/>24:40 こう言って、イエスは手と足をお見せになった。<br/>καὶ τοῦτο εἰπὼν ἔδειξεν αὐτοῖς τὰς χεῖρας<br/>καὶ τοὺς πόδας.<br/>24:41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、<br/>ἔτι δὲ ἀπιστοῦντων αὐτῶν ἀπὸ τῆς χαρᾶς καὶ<br/>θανυμάζοντων</p> |
|---|--|

る。ヨハネテキストは引用箇所20:20を積極的に主張しているのではなく、むしろルカのモチーフに批判的・否定的に対処しつつ記述していると思われる。用語使用を検討すればなおさら、ほとんど確実に、ルカテキストをヨハネがデフォルメしていると推定できる（黙示思想的「解釈」）。

ヨハネ20,19-31はルカ24,33-53のデフォルメであることはほとんど間違いない（拙論『わき腹』）。デフォルメの原点はルカの意味での歴史家的な「言語による外部注入主義」の神学への批判である。ルカは読者に「デイの論理」を注入しようとして「イエスの身体」を証明手段の素材にするという憤慨すべき蛮行を、つまり奇形的な合理化知性化による情感防衛を、行っている。このように物体化してルカが指し示す「イエスの身体」に、ヨハネ共同体は逆に情感防衛の蓋を取って、「それが無惨に破壊されていること（それは自らが合一を求めて刺し貫いた結果でもある。）」の痛みを見てしまう。「イエスの手と足」に彼らが見るのはその〈釘穴の痛み〉であり〈痛み穴〉である。刺し貫かれた苦難の僕の「受けた傷」（イザ53,5）の痛みである。

トマスの絶叫を聞いてみればよい。

XX トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見なければ、この指を釘跡に入れてみなければ、

YY また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、

ZZ わたしは決して信じない。」

あの最初の日曜日に「イエスの手とわき腹を見て喜んだ」者たち [ie 先行するキリスト者たち] についてのルカの記述は、トマスには [ie ヨハネ共同体には]、悪い冗談としてしか聞こえないのである。イエスの手に、イエスのわき腹に、あの痛ましい穴を穿ったのは結局のところ自分だという思いがあるからだ。

「彼らはイエスの身体穴の痛みが見えていない。」

重要なのは、素朴な感受性にとってはこの「申し訳なき」は不可避免的に燃え上がってくるということだ。拙論『わき腹』のトマス分析はこの「素朴な感受性」のまま突き進んだ（ある人達からは嫌悪された）。

しかしこの絶叫のなかに、「償いの欲求」を聞き取ることは筆者には全く思いもよらないことだった。ルカの証提提示言語の《地》に染め上げられて聞き取りにくい、確かにトマスの語りには、償いの激情のうちに我が手をイエスのあの傷跡に重ねたいという、彼の哀切の思いもまた響いているのだ（「刺し貫く」破壊衝動と共に）。

トマスは [ie ヨハネ共同体は]、イエスの〈痛み穴〉だけを、それだけを、漸増的に語り続けている。〈肉や骨〉の確かさ（ルカ）ではなく〈穴〉から吹き上げる根源的な抑うつ不安に取りつかれているのである。

ヨハネ共同体は「イエスの手と足」のその〈穴〉に、自らの前史のイエス運動破壊攻撃の帰結と、それにもかかわらず生き残ったイエスからの愛の噴出とを、見て取ったのだ。

ヨハネ共同体はその悲哀と罪意識のなかで、この瞬間にもまた、「全体対象としての復活のイエス」に遭遇し直したのであり、信仰者としての共同体の起源を再体験したのである。

## 2.4 「手と足」(ルカ)が「手とわき腹」(ヨハネ)に書き換えられるとき

——以下は、拙論『わき腹』、『見る知る』を足早に縦覧したものである

ルカ24,38-40：イエスは「手と足」をお見せになり、「触ってよく見なさい」と言われた。

ヨハネ20,19-29：イエスは「手とわき腹」をお見せになり、

「手を伸ばしわたしのわき腹に入れなさい」と言われた。

ルカの「手と足」の物語は、ヨハネ共同体のなかでは「手とわき腹」の物語に変わった。〈穴の痛み〉の前に激情的に立ち尽くした彼らは、〈穴〉から噴出する愛を全身に浴びたのだった。愛の流量のものすごさ(ゼカ14,8：エゼ47,1-6)に驚き感嘆した彼らは、「手の穴」、「足の穴」では間尺に合わず、「腹の穴」からの愛の噴出を語らざるを得なかった(エゼキエル書以来の「刺し貫く」のテーマ)、ということだ。「手と足の穴」を「手とわき腹の穴」へと転換すること、それはとりもなおさず、「手と足の穴」の痛みに自分を同一化する者が、(イエスのであって同時に)自己の痛みを「血と水」の中にありありと「見る」のだといえよう。この瞬間、ヨハネ共同体のイエス刑場物語は一新された(19,31-37)。

十字架上のイエスの「わき腹」が無惨にも突き刺され、そこから「血と水」が噴出するのを「見る」(悲哀と罪意識の根源への注視)ということが、中心テーマとなるのである。

そしてまたこの瞬間にヨハネ共同体には、7章での、水の祭り仮庵祭<sup>7</sup>の最終日の、イエスのあの「水の説教」が聞こえたのである。19章「刑場物語」での「わき腹プレウラ」と「血と水」に対応するものは、7章「水の説教」での「彼の内(コイリア)から生きた水が川となって流れ出る」という幻である。ここに「内(コイリア)」とは「腹、腸、食道、胎、心」要するに本来、身体の〈穴〉を意味している。ルカテキストにヨハネが接して痛ましい思いに駆られた、あの〈手の穴〉の衝激がここに反響しているのである。

ヨハネ共同体は十字架上のイエスの絶叫に「愛の水の説教」を聞いた。刑場物語もトマス物語もその必然的な展開である。これは4章「サマリア女の物語」の「ヤコブの井戸」に結びつく。

イエスの説教の頂点で焦点化された「命の水」が、つまりこの終点が、書き物(聖書)の始まりの「命の水」、「ヤコブの井戸」へと、つまりこの始点へと結ばれ、ここに円環が終結したのである。

ヨハネ「福音書」のイエスは、象徴的に、12章までの各偶数章の終わりで「天の門」(1,51参照)を通して帰られる。だからここでは逆にイエスが「天の門」から降り立たれたのであっても、不思議はないのである。「空虚な

<sup>7</sup> 筆者が繰り返し述べてきたごとく、7章にはイエスの降下来臨上昇退去の巨大な交錯配列が記述されていて(筆者はそれを第1組鏡像体と名付けている)、上記「水の説教」は象徴的に、共観福音書の「十字架上の絶叫」の位置を占めているのである(マルコ百人隊長の告白に対応するものはヨハ7,46)。ケーゼンマンの認知論からすれば、ヨハネ共同体は、伝承された「十字架上のイエスの絶叫」のなかで、(事後的に)イエスのこの愛の説教に、直接〈自分の耳と目で〉出会ったのである。

墓」(〈穴〉!) (20章)をしりえにされたイエスは、「天の門」(〈穴〉!)を出入りされ、「ヤコブの井戸」(〈穴〉!) (4章)から顔を出されたのだ。天上から地上にわたり、ヨハネ共同体の現在と創世記のヤコブの世界をまたぐスケールでの「生命の水」の循環である。

これらはイエスの身体の〈穴〉へ向けた、トマスのあのアンビヴァレントな絶叫のうえに立ち現れた黙示的イメージのまとめりである。その激情的な身体行為の背後にトマスの「罪意識」が漂っていた。これはちょうど「ヤコブ格闘物語」(創32,23-32)のヤコブと天的存在とのあの身体行動と、〈終わりを始めに結びつけるように〉呼応しあっているのである——この点につき発表者は、格闘の場の背後にヤコブの「罪意識」の存在を強調された並木浩一先生の説教(『人が孤独になるとき』所収同名説教)によって感銘をもって気付かされた。

### 3. 第三ゼカリヤと「水と霊」

#### 3.1 仮庵祭と諸国民全体の(残された者たちの)救済

第三ゼカリヤの最終章は水(14,8)と光(14,7)の歡喜の祝祭=仮庵祭(14,16-19)という、輝かしい終末論的約束に捧げられている。ここでは仮庵祭は黙示的終末論の救済を示現する象徴スキーマとして打ち固められている。この象徴スキーマの下で救済の日を迎えるのは、エルサレムの民であれエルサレムに攻め来たった他のすべての諸国民であれ、大混乱の中で「残された者<sup>8</sup>」(14,2.16)である。

他方、ヨハネ「福音書」は(注7にも述べたごとく)7章にイエスのカタバシス(7,25-31)―アナバシス(7,32-36)を鮮明に記述する交錯配列をかかえており(第1組鏡像体)、その上さらに、別の組のカタバシス(6,37-50)―アナバシス(8,12-29)という強大な交錯配列(第2組鏡像体)が7章を包んでいる。こうして7章は、12章にわたるいわゆるイエス公的活動部分の輝かしい「中点」<sup>9</sup>を形成している。この「中点」がどれほど強力で重層的なレトリック構造を蔵しているかは様々な機会に多面的に考察してきたので、ここではそれに言及することは控えることにするが、この7章のメインテーマが水と光の祝祭=仮庵祭なのであった!

ヨハ12,20-21とゼカ14,17-19, ヨハ12,14とゼカ12,11(ハダド・リンモン(ハダド・リンモン)の祭りは死んで甦る植物神の祭り)、ヨハ12,12-15とゼカ9,9-1との対照を踏まえてヨハ7とゼカ14が読み合わさ

<sup>8</sup> 第三ゼカリヤにおける「残された者」のテーマに、彼をになう共同体の神学と歴史の最も深い秘密が孕まれていると思われる。このテーマの絶頂は13,9である。後述するように、ここは明確にトマスの告白(という事はヨハネ共同体の最高最深の告白)に対応している。この「残された者」を精練精製する水と光の仮庵祭の象徴スキーマは、アブラハムよりも前からイエスはおられたと理解するヨハネ共同体にとっては、「水と霊」を注がれた者の復活のスキーマであることに注目したい。

<sup>9</sup> 筆者はヨハネ「福音書」中央に書き込まれたこのカタバシス―アナバシスのV字の交錯配列は、『アエネーイス』(12巻編成の「中点」6巻での冥界探訪物語の降下上昇)したがってまた『オデュッセイア』(12の漂流冒険物語のうちの「中点」第7話・冥界探訪物語)にならったものとする(『オデュッセイア』の、敵の海の中の決戦前夜の洗足物語もそうである)。タルバートによれば「筋の運びの中点近くにクライマックスを設定する」ことは「ローマの詩人たちの「悲劇作法の基本」であった(『ルカ文学の構造』加山訳 教団出版局 25)。さらにこのテキストはヨハネ共同体の始・中・終を語るという同位体を含んでいる。この観点からみるとエゼキエル書に鮮明な「処罰―救済」の巨大なV字構造が、共同体の歩みとして、重要である。



れ、象徴スキーマとしての仮庵祭がヨハネ共同体にとって持つ意義が考察されるべきであろう。

### 3.2 殺す水

ゼカ12,10:13,1には水と霊の注ぎが明瞭に語られている<sup>10</sup> (それは一次的直接的には荒れ狂い激突する死の増埒である)。前理解の「生命」の死を潜り抜ける、という意味の「霊」である。関根訳を参考にして筆者はまだなお暫定的に、12,10を「感動と祈願の霊を注ぐ。彼らはわたしを、彼ら自らが刺し貫いたその者を、じっと見つめ」と訳し(「彼ら」もこの殉教者の人物を殺したことで自ら「死んだ」のだということが直前の一文に示されている)、ヨハネ共同体の歴史がここに重なったものと理解する。彼らはイエスを偽預言者として(イエス運動をそういうものとして)強力に否定した前史があるのである。「彼ら自らが刺し貫いたその者」とは13,7の「牧者」でもであると筆者は解する。「申し訳ありませんでした」の抑うつポジションは、ヨハネにおいては、マルコの体験を踏まえ継承しつつも、なお幾倍にも増幅されている。13,1とその続きから見ても、ここでの「水と霊」はまず外的内的に「殺す働き」が注目されるべきである<sup>11</sup>。

### 3.3 偽預言者問題

まず殺し、そのことによって新しい生命に出会わせる「感動と祈願の霊」となる、あの「殺す水」。それが根本的には何を殺すのかを13章全体が語っている。偽預言者を(そして彼らに投影同一化された超自我を)殺すのである。そして驚くべきことに、このテーマの下に立つ13章の全9節をことごとく、ヨハネ「福音書」は明確に自らの根幹へと取り込んでいるのである<sup>12</sup>。

マルコと重なる「牧者の死」(V7-8)ならびに霊の注ぎに関連するV1はすでに述べた。偽預言者を「父母が殺す」という単位(V2-3)は、ヨハネ9章で、く生まれながらに目が不自由だった人がイエスによって再生したこと)の証を権力者の前で拒んだことによって、「彼の両親が彼を殺した」ことに使用されている(9,18-23)。またV9の頂点、親密な応答関係の最後のことは *κύριος ὁ θεός μου* (LXX) は、ヨハネ「トマス物語」の同じく親密な応答関係のなかでの(じっくりと対比されたい)トマスの最後の告白 *ὁ κύριός μου καὶ ὁ θεός μου* へと厳然と継承されている。ヨハネ「福音書」にとっては、トマス(たち)は第三ゼカリヤが語る、精錬

<sup>10</sup> 第一ゼカリヤの七つの「夜の幻」の七番目のものも「霊の注ぎ」が主テーマである。

<sup>11</sup> しかし古典的な預言者よりも更に鮮明に、第三ゼカリヤの語りには、聞く者が共鳴する位相の多様性が認められ、復活する新しい共同の生への通路が配慮されているように窺える(「残された者」の新次元)。弟子を叱責しつつテイを外部から注入するルカの言語と、聞く者の感情の自発的発露を前提とするヨハネの言語との対比は、両時期の預言者の言語の差異と平行しているが、ここにヨハネ言語の黙示預言者的契機が露呈している。

<sup>12</sup> 第三ゼカリヤのこのような読み取り方そのものに、ヨハネ「福音書」にとって、死が「先なるもの」となっていることがわかる。それはヨハネ共同体の実態についての歴史学にある示唆を与えている。つまりこの「福音書」は短命だったヨハネ共同体を「回顧的に」叙述しているのではないのか、ということである。

精製されたごく少数の「残された者たち」なのであろう<sup>13</sup>。

### 3.4 偽預言者の「両手の間の傷」と復活顕現のイエスの「両手の釘穴」

ゼカリヤ13章の残り V4-6は、ヨハネ「福音書」を貫いて竜骨をなす黙示表象群が発出する突破口をなす、例のイエスの「両手の釘穴」に恐ろしいほど結びついている（ここでのデフォルメは、エゼキエル書のリフレイン「主の手がわたしに臨んだ」がエクスタシーのうちに語られていることを考え合わせると、まことに激情的なものであることが知られる）。

ゼカ13-6 君の両手の間にあるこの傷は何なのか

*τί αἱ πληγαὶ αὐταὶ ἀνὰ μέσον τῶν χειρῶν σου (LXX)*

ヨハ20,25 彼の両手の中に釘穴を見ないでは

*ἐὰν μὴ ἴδω ἐν ταῖς χερσὶν αὐτοῦ τὸν τύπον τῶν ἥλων*

このV4-6は「偽預言者の滑稽化された傷」がヨハネにおける「イエスの深刻な傷跡」へと転換され、上記子殺しのV2-3も「偽預言者の預言活動」がヨハネにおいては「命を賭してのイエスを証す活動」へと転換されている。ここにはヨハネ「福音書」の語り手の深い罪の告白が滲み出ていると考えるべきではないだろうか。ここに見られる二種類の「転換」をそれぞれ元に戻してみればよい。ヨハネ共同体の前史において、彼らはイエスその人の所作風体を偽預言者のそれとみなし、イエスを証する人々を偽預言者のことばを振り撒く者たちとみなしたという、拭い去れない経験をしたのであろう。その罪意識の発現をヨハネ「福音書」の語り手はゼカリヤ12,10-14,13,7のうえに読み取ったのではないだろうか。

このようにしてヨハネ「福音書」において、「トマス物語」、「刑場物語」、「水の説教」、「ヤコブの井戸」を貫く「穴からの水」という黙示的表象の連鎖<sup>14</sup>は、第三ゼカリヤの偽預言者と仮庵祭という、終末論的テーマと密接に関係していたのである。そしてこの両テキストの対応関係を通じて突出してくる切迫した検討課題がある。ヨハネ「福音書」が生産された時点は、ヨハネ共同体がその歴史的な始・中・終を辿り終えた後ではないのかという困難な史学的問題、これである。

<sup>13</sup> トマスたちも確実に死ぬ。その上で「あるいは」生きる。ヨハネ「福音書」の8,31-59は、その同位体の掴み取り方によっては、『アエネーイス』の象牙の門に酷似した位置づけが与えられうる。全時のイエスに伴われてヨハネ共同体が、いよいよこれから現実の主戦場に入っていく、その道行きの開始点という場面設定がそれである。この同位体の前半部分（V31-47）には、来るべき決戦にそなえ「イエスに信じているつもりの方々」に対して遂行される試練と教導、という物語が聞き取れる。試練と教導として読み取られる場合の、この同位体の内部編成は極めて厳格な形式性をそなえている（種々の機会に既述）。筆者は今まではそれを申命記が戒め・勧告を提示する方式に則っているものとしてしかつかめていなかった（申命記18,15-22をヨハネが引用していることは、偽預言者問題にも関係することであり、この点、ゼカリヤ13章の改変引用と平行している）。

<sup>14</sup> それぞれの表象単位の呼応が密接であり、それらが一気に呵成に結合されたに違いないことからすれば、このテキストの全体構成は超短期間になされたであろうことがうかがわれる。